

WINDS CAFE 330 in 原宿

プーランク

Francis

Poulenec

2024 6/16 Sun 14:00start

会場：芸術家の家スタジオ

フランシス・プーランク *Poulenc, Francis*

1899～1963年(和暦 明治32年～昭和38年)

フランスの作曲家、ピアニスト。

裕福な家庭に生まれ5歳でピアノを学び始めるが以降音楽の学校に行くことはなく、独学で作曲を始める。フランス6人組の一員として活動し、また音楽でだけでなくジャン・コクトー やディオールなど当時のパリで活躍した様々な芸術家との交流もあった。

バレエ音楽、オペラ、管弦楽曲、ピアノ曲など様々なジャンルを手がけているが、特に声楽の曲については多くの作品を残している。

プーランクの音楽の大きな特徴としては、歌をイメージした美しい旋律が沢山用いられていることである。

また生粋のパリジャンであった彼の作品には、パリの様々な情景が浮かぶ、軽妙でおしゃれな作風が特徴的である。



15の即興曲より第15番「エディット・ピアフを讀えて」

フランスで活躍したシャンソン歌手、エディット・ピアフのファンだったプーランクは彼女にこの曲を捧げた。シャンソンの要素も少し盛り込んだ、プーランクのピアノ曲で最も有名な曲。

「子象ババールのお話」(ぞうのババール ジャン・ド・ブリュノフ作 矢川澄子訳 評論社)

フランスの作家、ジャン・ド・ブリュノフ作の「子象ババールのお話」にプーランクが音楽を付けた作品。親戚の子供達がこのお話に夢中になっているのを見て、音楽を付けることを思い立った。戦争による中断を経て1945年に完成。ババールという子象の成長を描いた物語ではあるが、幸せ、喜び、悲しみ、憂鬱、などプーランクの音楽の世界によって更に深い表現がなされている。最初はピアノのために書きプーランクのピアノ曲の中でも非常に優れた作品であるが、後に友人の作曲家フランセがオーケストラ版に編曲。

ヴァイオリンソナタ FP119

プーランクはヴァイオリンの音色が苦手だったと語っていたそうだが、1943年、当時の名ヴァイオリニスト、ジネット・ヌヴーに依頼されこのソナタを作曲する。

またスペイン内戦中に銃殺されたスペインの詩人ガルシア・ロルカの思い出に捧げられている。

1楽章 非常に荒々しく、また軍隊を彷彿とさせる旋律が登場。

2楽章 最初に完成したのはこの楽章。ガルシア・ロルカの詩より引用した冒頭部分。“ギターは夢を泣かせる”という詩から生まれた、ギターを彷彿とさせるヴァイオリンの奏法が印象的。

3楽章 痛々しくという表示がなされ、悲劇と喜劇が混在し、クライマックスには銃声を表現したと思われるシーンがピアノに登場。

チェロソナタ FP143

またも名チェリスト(ピエール・フルニエ)に依頼されたために、1948年に作曲をする。弦楽器の扱いを苦手としていると依頼者にも公言していたのだが、当時のこの曲の評価はヴァイオリンソナタよりはいい、という程度であったにしろ、このチェロソナタはプーランクの至高の楽曲と言っても良いだろう。

プーランクの魅力である、爽やかで洗練された音楽、そして旋律の美しさを惜しみなく盛り込んだ作品である。プーランクのソナタの中で唯一の四楽章構成。

1楽章 陽気な行進曲のリズム、様々なメロディーが次から次に衝動的に現れ、フランス人らしい気変わりの早さが表れている。

2楽章 一転して、チェロが美しく歌う「カヴァティーナ」。パリの夕暮れ時のような、哀愁漂う素晴らしい楽章。

3楽章 「バッラービレ」、舞踏という意味。パリの夜会のような賑わい、上機嫌なムード満載。

4楽章 フィナーレ、深刻な始まりだが、フランス人らしく軽妙になつかつ豪華絢爛。



田添菜穂子 —ナレーション— Nahoko Tazoe

福岡県出身、イギリス・ノッティンガム大学留学を経て横浜国立大学経済学部卒業。東北放送アナウンサーを務めた後フリーに。クラシックをこよなく愛し全国各地にてオーケストラ・室内楽コンサートの司会や朗読共演などを行う。音楽で子どもたちの生きる力を育む「エル・システムジャパン」の事業にも参画。趣味はフルート、フランス語

2013年～2018年までNHK-FM「DJ クラシック」を担当。

今年4月～NHK-FM「クラシックの庭」出演中。

佐々木繪理子 —Violin— Eriko Sasaki

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京藝術大学を経て、同大学大学院修士課程修了。英国王立音楽院修了。藝大在学中に福島賞、安宅賞受賞、藝大オーケストラと共に演。英國王立音楽院在学中に Benjamin Dale Award, Wilfred Parry Prize 受賞。ヴァイオリンを重見純子、藤田めぐみ、大関博明、大谷康子、澤和樹、山口裕之、前橋汀子、György Pauk の各氏に師事。新日本フィルハーモニー交響楽団 2nd ヴァイオリン・ファースト・ソリスト。横浜シンフォニエッタメンバー。



竹本聖子 —Violoncello— Seiko Takemoto

福岡県出身。東京音楽大学卒業、同大学院修士課程修了。アンサンブル、在京オーケストラへの客演や、レコーディングやミュージカルの演奏、国内外の作曲家の作品の世界初演も数多く行っている。

ヴァイオリン、チェロ、三味線、作曲家によるクリエイショングループ「淡座」、「オーケストラ・トリプティーク」メンバー。

渋谷教育学園渋谷弦楽器講座、吉祥女子中学高等学校課外授業講師。



百武恵子 —Piano— Keiko Hyakutake

東京音楽大学、大学院を経て、パリ国立高等音楽院にて伴奏科、室内楽科を一等賞を得て修了。2007年文化庁海外派遣芸術家海外研修員。フランス国際コンクール室内楽部門第一位。在学中よりロンティボー国際コンクール、カザルス音楽祭、などに公式伴奏者として参加。弦楽器クラス伴奏者を度々兼任し、パリ国立管弦楽団、フランス国立管弦楽団などのメンバーと共に演。09年に帰国。10年文化庁国際交流基金の支援のもとアルジェリアにてリサイタルを行う。

ピアノを三浦捷子、川上昌裕、伴奏法と室内楽をJ.ケルネル、山洞智、C.イバルディの各氏に師事。東京音楽大学非常勤講師(伴奏、室内楽)。

